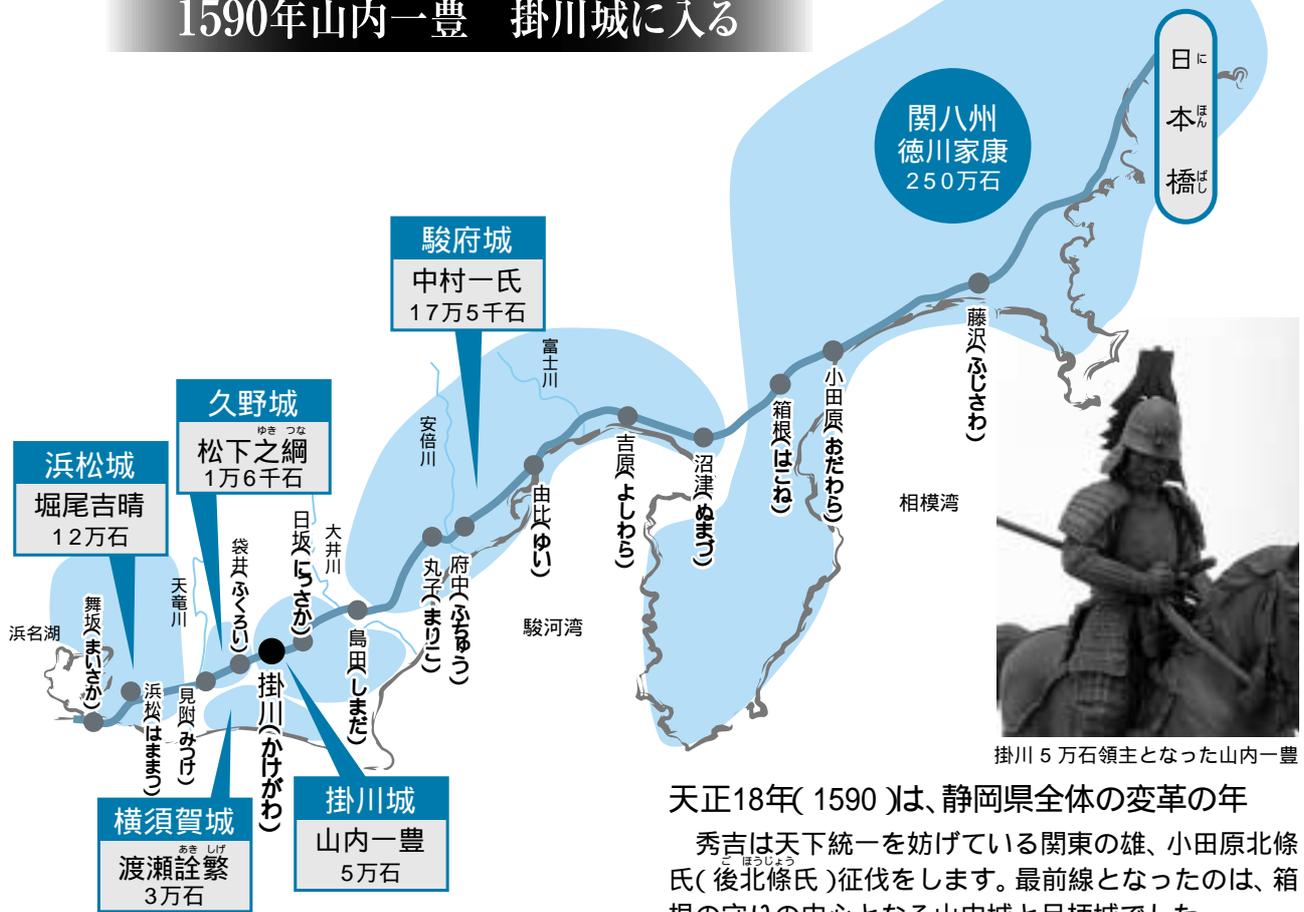


いつの時代も、天下を支配する将軍との関わりが深かった掛川

山内一豊までの掛川の武将たち — 6

1590年山内一豊 掛川城に入る



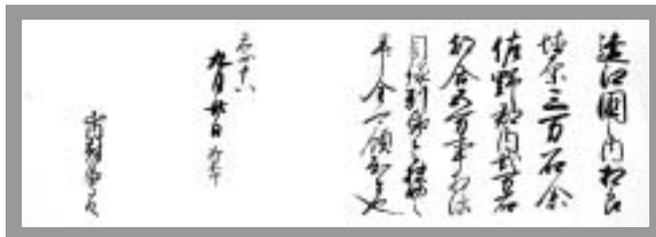
掛川5万石領主となった山内一豊

天正13年(1585)は、一豊の人生転換期

徳川家康が三方原の戦いで武田信玄に破れて9年の後、宿願の高天神城を落として、遠江の支配を完全なものとし、そのころ、山内一豊は豊臣秀吉のもとに紀州征伐、北陸進攻、四国へと戦いを続け、戦功を重ねます。そして、天正13年(1585)41歳の一豊は、近江長浜2万石の城主となります。

長浜時代、一豊には、それまでの人生を変える出来事が起こります。大地震で一人娘のよね姫を失い、城や家臣に大きな被害を受け、人生の無情を感じます。日蓮宗から臨濟宗へと転宗し、南化国師との出会いから、深く仏道に帰依し、京都妙心寺に墓を建てます。

北国攻めの兵站実績が高く評価され、一豊は、この時期家臣も多く召し抱えます。このころ採用した家臣が、後の掛川藩や土佐藩の重臣になっています。明治に活躍した板垣退助の先祖、乾彦作もその一人です。



一豊が秀吉から掛川5万石を拝領した領地受領朱印状(財)土佐山内家宝物資料館蔵

天正18年(1590)は、静岡県全体の変革の年

秀吉は天下統一を妨げている関東の雄、小田原北條氏(後北條氏)征伐をします。最前線となったのは、箱根の守りの中心となる山中城と足柄城でした。

特に、山中城攻めは豊臣秀吉を大将とし、中村一氏・堀尾吉晴・山内一豊・一柳直末を先陣とする、総勢6万8千の総攻撃でした。

圧倒的な数の違いにより攻め落とし、一豊家臣の深尾湯左衛門重良・林伝左衛門一吉・江田四郎らが兜首15ほどを取る活躍をしています。3か月後、小田原城も落ち、ここに5代百年にわたり、関東支配をしていた戦国大名後北條氏は滅亡します。

戦の後の論功行賞で、家康に後北條氏の関東八州が

与えられ、家康は駿河・遠江・三河・甲斐・信濃の5か国を手放し、関東へ移ります。そして、その家康の旧領へ、豊臣家に信頼の厚い中村氏、堀尾氏、山内氏が配置されます。

掛川には、山内一豊が5万石の領主として入城し

ます。この大名の配置から、秀吉がいかに東海道筋を重視していたかがわかり、関東に移封した家康の喉もとを押さえる形で豊臣系大名を配置しています。

(監修：掛川市郷土研究会連絡協議会)